



江戸時代後期

やまびこ館常設展示内「鳥取城シアター」城郭復元CGより
(左上：二ノ丸御殿、右下：三ノ丸御殿)

お城の中ってどんな風？

おうちだに画報の発信地、^{おうちだに} 檮谿の名所（！？）やまびこ館の常設展示の名物（！？）に、「鳥取城シアター」があります。江戸時代半ば、享保5年（1720）、城下を焼き尽くす大火によって焼失した二ノ丸御殿は、120年以上後の弘化3年（1846）にようやく再建されます。「鳥取城シアター」では、この時造られた二ノ丸御殿をコンピューターグラフィックスで再現しました。書院などの部屋の中を歩いて眺めるような感覚の味わえるコーナーもあります。御殿再建時の平面図は遺されていますが、実際にその中がどうなっていたかは想像の域を出ませんので、あくまで画像は想定復元です。

御殿には、在国中の藩主が生活する居住スペースと、藩士たちが出勤して働く役所的なスペースがあります。鳥取城の場合は、江戸時代の中・後期はほとんど三ノ丸御殿（現在の鳥取県立鳥取西高校のあたり）が両方の機能を果たしています。前述の弘化年間の二ノ丸御殿も、実際に藩主（10代 ^{いけだ よしゆき} 池田慶行）が使用したのは1年にも満たな

いほどで、すぐに三ノ丸に移っています。

とはいえ、御殿の建設は藩にとっては大事業で、多くの藩士たちが関わっていますし、藩主の「お好み」も、内装に反映されていたようです。その内装に携わったのは主に藩絵師と呼ばれる、職業絵師たちでした。

藩絵師って？

藩絵師とは、藩から禄（お給料）をもらって、絵図や絵の作成を行なう画家たちです。雇い主が幕府



の場合は御用絵師と呼ばれ、江戸時代では狩野派が有名です。鳥取藩では、主に江戸屋敷で仕事をすする江戸詰め絵師と、国元で働く絵師がいました。江戸詰め絵師の仕事には、藩主家の人たちへの絵の手ほどきもあり、主家との関係は親密だったようです。弘化の二ノ丸再建の際の絵師たちの活躍についても、遺された藩の資料などから、おおよそかがい知ることが出来ます。代々の家業ではなくこの時の功績をもとに、絵師に登

用された者もいます。画業を継ぐ者、画業を志すもの、彼らはどうやって絵を学んだのでしょうか。

江戸時代の絵師の多くは、絵を写すことから始めます。それは代々伝わる手本であったり、数百年前の名画の写しであったりしますが、多くは中国から伝来した文化の影響を強く受けています。そもそもこの頃の美術品は注文主による指示や、用途など、何らかの目的のために制作されるものがほとんどで、荘厳な雰囲気をかもしだすもの、おめでたい文物などが中心です。ですから絵師たちは、中国故事をはじめとして、文学にも精通していたようです。

ちょっとお知らせ

このような、江戸時代の鳥取の藩絵師たちの、作品に至るまでの苦勞のようすを伝える展覧会を3月19日からやまびこ館で開催します。タイトルは「絵師たちは何を見たか」、ぜひご覧ください。お楽しみに！

（鳥取市歴史博物館 森田子）

お詫び

先月号のおうちだに画報の中で、「鳥取市鹿野町にある加知弥神社の宮司であった飯田秀穂が、郡山の宇倍神社を訪れた際に詠った歌」と紹介しましたが、歌を詠んだ当時は国府町の宇倍神社の宮司をしていて、後に加知弥神社の宮司となりました。

記述が不十分なことにより誤解を招きましたことを深くお詫び申し上げます。

（やまびこ館 奥村）

■問い合わせ先 やまびこ館 上町88
☎ (0857) 23-2140